

公共図書館利用と文化活動の関連性

——住民調査にもとづく文化行政への示唆——

The Relation between Public Library Use
and Cultural Activities

糸 賀 雅 児
Masaru Itoga

Résumé

Most of public library surveys in Japan have not been directed to potential or non-users but to library visitors. Now a survey has been completed for determining the citizen's usage of public libraries and other public facilities, i.e. public halls (*koumin-kan*), museums, art galleries, and so on. This survey can also make a significant suggestion that one's library use has something to do with his or her other social and cultural activities. Library service is most used and best known among local public services. The higher one's educational level, the more one uses public libraries. Library users are disposed to participate in other cultural activities as well. Though the number of library users with a lower educational level is very small, they are willing to involve themselves in several activities. Finally two things are proposed. A variety of public needs should be met by several types of services in a community. And those who are not oriented to library use and cultural activities should be offered appropriate programs rendered by public halls or the like.

- I. 公共図書館調査の現状
- II. 岩槻市における住民調査
 - A. 調査目的
 - B. 調査地の選定
 - C. 調査方法
- III. 結果の概要と考察
- IV. 公共図書館と文化活動

糸賀 雅児：慶應義塾大学文学部図書館・情報学科助手，東京都港区三田2-15-45
Masaru Itoga: Lecturer, School of Library and Information Science, Keio University, Mita, Minato-ku, Tokyo.

公共図書館利用と文化活動の関連性

A. 住民調査の結果の要約

B. 文化行政への示唆

V. おわりに

I. 公共図書館調査の現状

わが国公共図書館界で、社会調査の手法を応用した図書館調査の必要が唱えられるようになってすでに久しい。図書館内部での職員自身による定期的な調査となると、まだそれほど多くなく、広く普及しているとはいえないが、最近では研究者による種々の調査が発表され、図書館調査の報告例は着実に増えつつある。筆者はかつて、わが国のそうした調査のいくつかを、1) 利用者調査および住民調査（一般に、調査単位は個人）、2) 地域実態調査（一般に、調査単位は自治体）、3) 図書館統計調査（一般に、調査単位は図書館）、の3つに分けてレビューしたことがある¹⁾。その後も公共図書館を対象とした調査は発表され続けているが、上の3つのタイプのなかでも、とくに図書館の利用者（来館者）を対象にした調査の多いことが特徴的である。

例えば、大阪大学人間科学部社会教育論講座では、吹田市立千里図書館と松原市民松原図書館について利用者調査を実施し、詳細な報告書を刊行している²⁾³⁾。それらはいずれも、基本的に短期間の図書館来館者に対するアンケート調査である点において従来の調査と変わらない。また、京都大学教育学部図書館学研究室でも、同様の来館者調査を阪神地区⁴⁾、東北地方の一都市⁵⁾、近畿地区⁶⁾、中京地区⁷⁾、のいくつかの市立図書館で実施している。この一連の京大調査は、いずれもほぼ同一の調査票を用いており、相互比較ができる点で有用である。ただし、調査の日程や配票方法など、細かな点で調査ごとに多少相違が見られ、比較にあたっては注意が必要である。

来館者に対するアンケート調査ということでは、大沢まどか・杉村優の研究⁸⁾も興味深い。大沢らは、満足度や利用頻度、読書量といった従来の調査項目に加えて、自発的支払い（図書館利用にどの程度の貨幣価値を見出すか）をとり上げ、それに関わる要因を明らかにしようとした。しかし残念ながら、調査者自身も指摘しているように、自発的支払いについて何らの基準も設けなかったためか、十分な成果は挙げられていない。

この他に、郵送法を用いて図書館登録者を調査したものととして、植松貞夫・緒方みどりの調査⁹⁾がある。これ

は、柏市立図書館の登録者から約5%を無作為抽出してアンケート用紙を送付したものであり、来館者調査のように結果的に図書館の常連が対象となってしまうものと異なって、それよりも幅広い利用層を対象にしている。とくに、分館を含めた市内の図書館システム全体の登録者をカバーできたことにより、これまでの来館者調査では得られなかったような利用行動が明らかにされている。しかし、郵送法という調査法がもつ限界のために、回収率が低い（全体で52.3%）ことが難点である。

さらに、図書館問題研究会東京支部が行なった練馬区の図書館調査は¹⁰⁾、これまで述べてきた調査と同様の手法による来館者調査の他に、登録者分布や予約処理状況、重複購入なども並行して調査した複合的なものである。また、田村俊作・酒井裕美子は¹¹⁾、公共図書館における資料の入手可能性（availability）を来館者調査にもとづいて算出し、図書館評価に活用することを試みている。この両調査は、これまでわが国では実施されたことのないタイプの調査であり、図書館活動や図書館利用の実態をより多面的にとらえようとしている点で評価できる。

以上挙げしてきた最近の調査と先行の諸調査とにより、公共図書館の利用者像や利用実態、利用行動はかなり解明されてきたと言ってよいだろう。その意味では、わが国の公共図書館利用者（来館者）調査は、今やその成果を自治体の図書館行政や各館の運営にどのように活かすかを考えるべき段階に移りつつあると見られる。すなわち、わが国の利用者調査の方法や内容、調査事例数といったものは、決して満足すべき水準に達してはいないが、だからといって、ともかく調査の事例を増やしデータの積み重ねを目指すという段階でもない判断される。このことは同時に、これまでのような来館者や登録者だけを対象にした調査ではなく、図書館の非利用者をも対象とするような調査の必要性を意味しよう。そしてもう一点、これまでの調査が主に利用者を対象にしてきたことから必然的に生じる限界として、図書館という一施設の利用状況、ないしは読書という限られた行動しかとり上げてこなかった点が指摘できる。図書館利用を図書館や読書という限られた文脈だけでとらえるのは十分でない。もう少し広い文化的・教育的な視野で他の文化・

教育施設の利用や活動と重ね合わせながら見ていく必要がある。

もちろん、いま必要性を指摘したような種類の調査が、これまで皆無であったというわけではない。例えば、よく知られたところでは、昭和54年に総理府が実施した『読書・公共図書館に関する世論調査』がある。その後にも、寄藤昂が情報資源に関する総合研究のなかで、5都市の市民全体から抽出したサンプルに対し郵送調査を行なっている¹²⁾。しかし、前者はそのタイトルにも示されているように、もっぱら読書と公共図書館のことを扱っており、しかも自治体の図書館行政や図書館運営に役立てられるようなデータをひき出すことがねらいではない。また、後者にしても、図書館や書店といった読書資料の入手先はとり上げていても、その他の施設の利用については触れていない。現実の図書館行政は、他の公的な(場合によっては民間の)文化・教育施設との兼ね合いで施設配置、予算配分等が行なわれる傾向にある。それにもかかわらず、そうした視点にたつて図書館をとらえ直そうとする調査は、まったく無かったのである。

このような公共図書館調査の現状に照らせば、図書館の非利用者をも含めた地域住民全体を対象とし、しかも他の文化的な活動について言及できる調査の重要性が理解されよう。そこで次章からは、上に述べたような現状認識と課題分析を踏まえ、先に筆者が行なった住民調査について報告していくことにしたい。したがって、今回の調査報告の基調となっているのは、図書館利用者と非利用者の対比であり、同時に文化・教育行政への示唆ということになる。また本稿が、「文化活動」と呼ばれているものの全体をとり上げて、その実像を描き出そうとしているのでないことは、すでにこれまでの部分で明らかであろう。それ故、ここでとりあえず「文化活動」と呼んでいるものは、後述の調査の設問に取り込まれた各種の個人的活動に対する総称であって、これによって「文化活動」が網羅されるとは考えていないことを予めお断りしておく。

II. 岩槻市における住民調査

A. 調査目的

すでにI.での叙述からも示唆されるように、今回の調査は2つの大きな目的をもっている。その1つは、調査対象を図書館の非利用者も含めた成人住民全体とすることにより、利用者と非利用者の特性を対比的に明らかにし、非利用者の意識や行動様式をとらえることである。

そして第2に、図書館以外の文化・教育施設の利用状況や活動への参加状況も調べ、図書館利用と他の文化活動との関連を探ることもねらいとしている。すなわち、公共図書館を文化施設の1つとしてとらえ、図書館利用者は、他の文化施設も利用しているのか、それとも図書館だけをよく利用しているのか、非利用者は図書館以外の施設をどの程度利用しているのか、といったことがらを明らかにしようというわけである。さらに、副次的な目的として、文化施設の周辺に居住する者とそうでない者との間で、施設の利用や文化活動に対する考え方にどのような差異が見られるか、についても検討することとした。

そして、これらの目的を掲げることにより、究極的には自治体の文化行政ならびに図書館行政、とりわけ文化施設の建設・配置計画といったものに活かせるようなデータをひき出し、公共図書館の適切な位置づけを得るための一助とすることを目標としている。

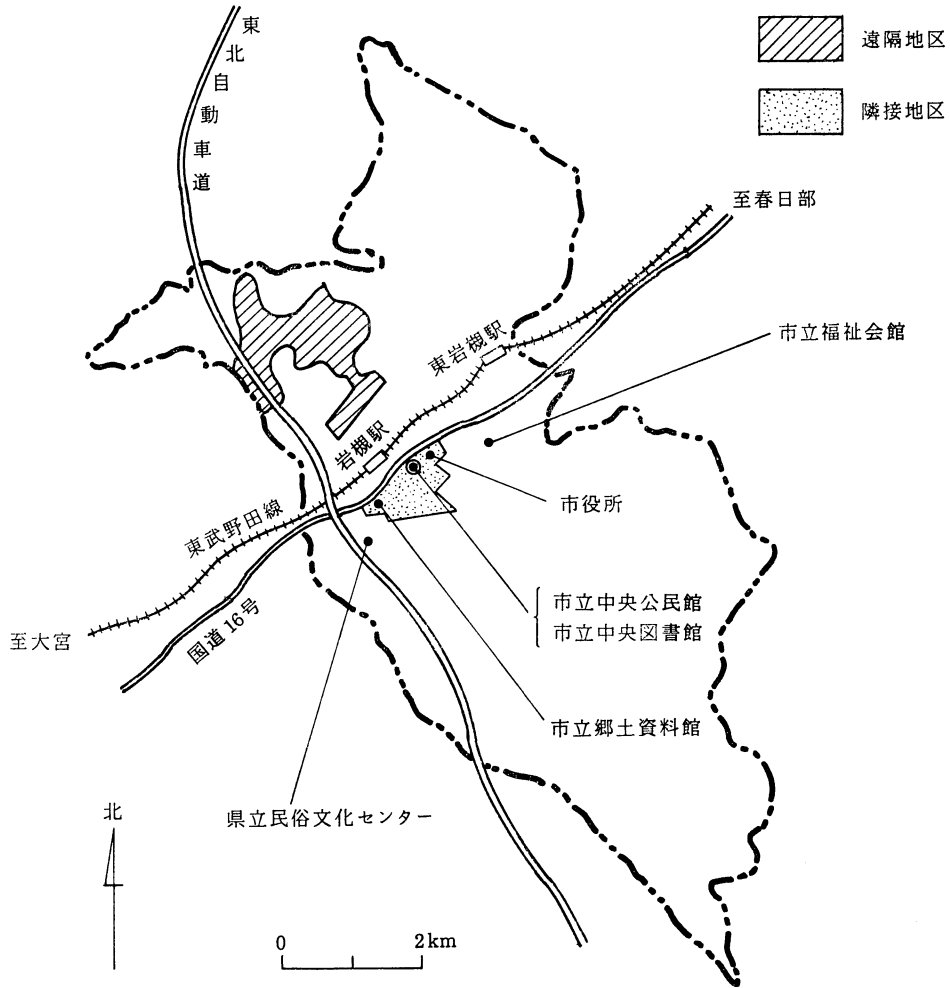
B. 調査地の選定

文化施設の集中度、自治体の規模、調査時の各種施設の活動度、調査員の確保の可能性等を勘案し、埼玉県岩槻市を調査地に選んだ。

岩槻市は、埼玉県の東部に位置し、東は春日部市、西は大宮・浦和・川口・上尾の各市と接している。もともと岩槻藩の城下町として、また日光御成街道の宿場町や市場町として栄え、岩槻人形、桐材利用のたんす、羽子板製造などの伝統工芸で知られている。東武野田線と国道16号、東北自動車道などが走る交通の要衝であり、東京都心から30km圏ということもあって、近年、住宅団地や企業の進出が著しく、急激な都市化現象を見せている。岩槻市の面積は49.76km²、調査時の人口は98,294人(1983年1月1日現在)である。

文化施設に関しては、第1図に示すように、東武野田線の南側に、市役所をはじめとして、市立中央図書館、市立中央公民館(図書館と公民館は、同じ建物の1階と2階を分けあっており、1階が図書館、2階が公民館である)、市立郷土資料館、市立福祉会館、埼玉県立民俗文化センターの各施設が比較的近接している。古い街並や商店が残されているのはこの一帯であり、岩槻駅の北側には新興住宅が増えて、東京方面へ通う人が移り住みつつある。ちなみに、図書館は主階である1階の床面積が848m²、蔵書は13万冊、82年度の館外貸出冊数が30万7千冊で、自動車図書館を1台もっている。

公共図書館利用と文化活動の関連性



第1図 調査地（岩槻市）の概況

第1表 調査地区の世帯数および人口
(1983年1月1日現在)

	世帯数	人口	男	女
隣接地区	2,056	6,812	3,401	3,411
遠隔地区	2,018	6,931	3,490	3,441

C. 調査方法

1. 調査対象および調査日程

各種の文化・教育施設をその内部および周辺にもつ地区として、市立中央図書館、市立中央公民館、市立郷土資料館を含み、市立福祉会館と埼玉県立民俗文化センタ

ーに近い6町丁（本町2丁目、本町4丁目、本町6丁目、仲町1丁目、東町1丁目、東町2丁目）を選び、「隣接地区」と呼ぶ。そして、これらの各種施設から1～2km以上離れ、岩槻駅をはさんで東武野田線の反対側にある6町丁（西町3丁目、西町4丁目、美幸町、金重、本宿、平林寺）を選び、これを「遠隔地区」と呼ぶ。（第1図参照）

これら両地区に居住する住民数は第1表の通りであるが、それぞれの地区から成人男女300人ずつ、合計600人を選挙人名簿から無作為抽出し、調査対象とした。

なお、実査は1983年2月下旬に行なった。

2. 調査項目

II-Aに掲げたような目的を達成するために、以下のような調査項目を設定した。(詳細は、本稿末尾の調査票を参照されたい。)

- ・ 日常の関心事
- ・ 文化・教育活動への意識と参加経験
- ・ 文化・教育施設(公共図書館を含む)の利用経験
- ・ 図書館ならびに公民館の各種事業・サービスの認知度
- ・ 図書館ならびに公民館の利用による効果や影響
- ・ 図書館ならびに公民館の非利用の理由
- ・ 回答者の属性(性別, 年齢, 職業, 学歴, 家族構成, 居住年数)

上記の各項目について、いずれも選択肢を用意し、その中から回答者に選んでもらうようにした。

3. データ収集方法(実査の方法)

今回の調査は、いわゆる利用者調査と異なり、文化・教育施設(とくに公共図書館)の来館者や登録者だけを対象としているのではない。むしろ、この種の施設をあまり利用しない人びとを多く調査対象として含むことになる。このような住民調査の場合、郵送法(調査票の配布も回収も郵送によるやり方)をとると、過去の調査事例の結果⁹⁾¹²⁾から見て回収率がかかなり低下してしまうことが予想される。また、電話調査とすると、ふだん勤めに出ている人や外出しがちの人からの回答が収集しにくくなるうえ、質問の理解と回答の選択における正確性、信頼性の確保の面で懸念される。そこで、調査票を用いた訪問留置法を採用した。

すなわち、被調査者として抽出された成人男女600人に対し、調査員がその居住地を訪問、調査票を配布した後、あらためて回収する方法をとった。そして、この場合の調査員には調査専門機関の調査員を充てた。そのため、被調査者の数は必ずしも多くないが、このような方法をとったことにより、単なる回収率だけでなく、有効回答の得られた調査票の回収率(有効回収率)をも高めることができたと考えられる。

III. 結果の概要と考察

ここでは、調査票での設問の順序とは関係なしに、今回の調査の目的に即して結果を提示し、それをもとに考察を進めていく。

A. 回収状況

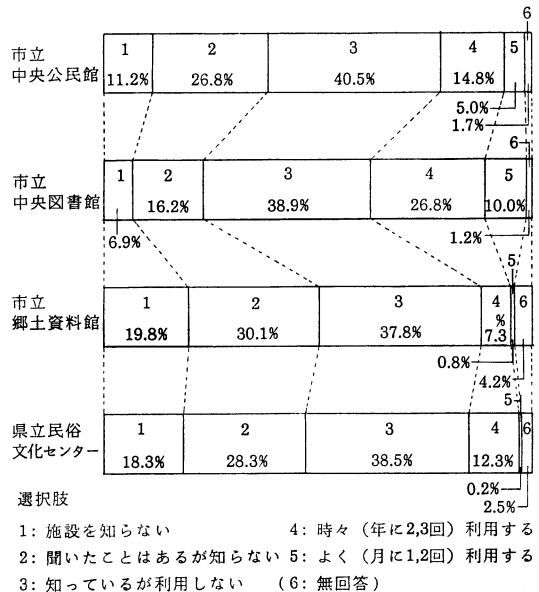
	配布数	有効回収数	有効回収率
全体	600	481	80.2%
隣接地区	300	234	78.0%
遠隔地区	300	247	82.3%

B. 回答者の属性

回答者全体の人口統計学的な特性(いわゆるフェイス・シートに相当する部分)は、第2表に示すとおりである。

C. 市内施設の利用率

市内の4つの公共施設の利用率は、第2図に示すとおりである。これによると、図書館は他の3施設に比べて利用率が高く、その存在を知らない人も少ない。利用率の高さからは、公民館、民俗文化センターがこれに続いており、郷土資料館の利用はきわめて少ない。しかし、「施設の概要を知っているが利用しない」という人の割合は、どの施設でも4割前後であまり変わらない。なお、この第2図(調査票の問6-1)において選択肢の4ないし5を選択した人を以下では「利用者」、1、2、3を選択した人を「非利用者」と呼ぶことにする。したがって、図書館の利用者は177人(36.8%)、非利用者は



第2図 市内施設の利用率(回答者数 481人)

公共図書館利用と文化活動の関連性

第2表 回答者の人口統計学的な特性

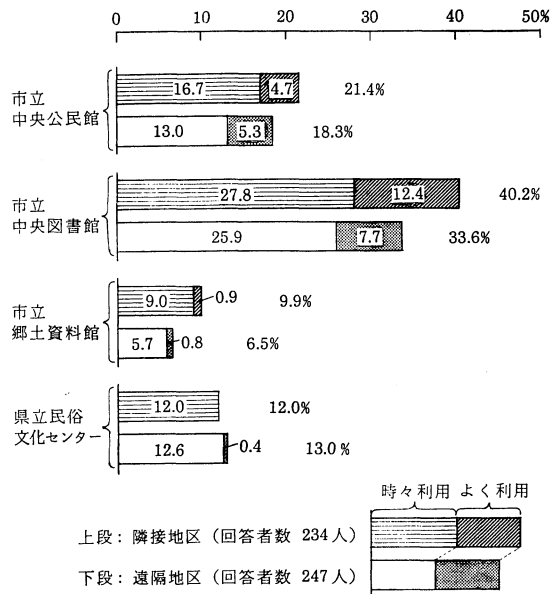
性別 (N 481)	1. 男	51.4%	(247)	学歴 (N 478)	1. 小学校・中学校	24.7%	(118)
	2. 女	48.6	(234)		2. 高等学校	47.1	(225)
年 齢 (N 480)	1. 20～24歳	9.8%	(47)	家族構成 (N 476)	3. 短大・高専	13.6	(65)
	2. 25～29	7.7	(37)		4. 大学・大学院	14.6	(70)
	3. 30～39	27.3	(131)		1. 単身	5.7%	(27)
	4. 40～49	30.4	(146)		2. 配偶者のみ	12.4	(59)
	5. 50～59	18.5	(89)		3. 配偶者と小学生以下の子供	30.7	(146)
	6. 60歳以上	6.3	(30)		4. 配偶者と中学生以上の子供	37.8	(180)
職 業 (N 471)	1. 農林漁業	3.2%	(15)	居住年 (N 480)	5. その他	13.4	(64)
	2. 商工サービス業	10.8	(51)		1. 昭和35年以前	36.9%	(177)
	3. 自由業	2.1	(10)		2. 昭和36～45年	27.3	(131)
	4. 農林漁業(家業として)	0	(0)		3. 昭和46～55年	31.0	(149)
	5. 商工サービス業(")	4.7	(22)	4. 昭和56年以降	4.8	(23)	
	6. 自由業(")	7.4	(35)				
	7. 管理職	4.6	(21)				
	8. 専門技術職	5.1	(24)				
	9. 事務職	17.6	(83)				
	10. 技能・作業職	16.3	(77)				
	11. 無職の主婦	21.4	(101)				
	12. 学 生	2.8	(13)				
	13. その他	4.0	(19)				

注) 有効回答の全体 (N) に占める比率で示した。
カッコ内は回答者の実人数である。

298人 (62.0%) である。

次に、これらの施設の利用率を本調査で設定した隣接地区と遠隔地区の間で比較してみよう。(第3図参照) 民俗文化センターを除く3つの施設で、利用する人の比率は隣接地区のほうが高くなっており、確かに居住地から施設への距離が利用に影響しているように見受けられる。ただし、その差はそれほど大きいものでなく、民俗文化センターでは両地区の差がほとんど無いといってよい。後述される(Ⅲ-J)のように、図書館を利用しない理由として「施設が遠い」を挙げる人は、遠隔地区で18.8%、隣接地区で2.2%であった。したがって、今回の調査で設定した程度の距離の差(1～2km)は、施設の利用に対し、それほど大きいとは言えないもののある程度の影響を及ぼしていることは確実である。

また、施設の利用率を学歴別に見てみると第3表のようになる。これは、それぞれの施設について「時々利用する」あるいは「よく利用する」と答えたものの比率を学歴別に示したものである。これを見ると、公民館は高



第3図 施設利用の地区別比較

校卒や短大・高専卒の利用が他の学歴層に比べてやや高いの対し、図書館は学歴の上昇につれて利用度も高くなる、という両施設の利用傾向の違いがわかるだろう。とくに大学卒の図書館利用度がきわめて高く、「時々利用する」と「よく利用する」とを合わせれば、50%を越えることは注目される。他の2施設は、もともと利用度が低いせいか、学歴による差異はほとんど見られない。

そこで、図書館の利用度に着目し、第4表に掲げた学歴別の図書館の利用率にもとづき、以下では便宜的に中学卒を「低学歴」、高校卒、短大・高専卒を「中学歴」、大学卒を「高学歴」とする。

D. 施設事業の認知度

公民館と図書館の各種事業、設備、サービスの認知度をたずねた結果が第5表である。ここに掲げた施設事業のうち、1～6は公民館のものであり、7～12は図書館のものである。移動図書館の認知度とブックポストの利

用度がやや突出しているが、全体として見れば、先の利用度の場合ほど図書館と公民館の間で認知度に差があるわけではない。この表で見るかぎり、むしろ、公民館のほうが一般に認知度や利用度は高いようである。これは、図書館の利用形態の大半が資料の貸出しによって占められており、貸出しがここで挙げた図書館関連の設備やサービスの利用を常に伴って展開されるわけではないためだろう。また、公民館については先の利用度の調査結果とも考えあわせると、提供事業についてはかなり広範に知られているものの、実際の利用は図書館ほど多くないということになる。

なお、「5. 英会話の夕べ」と「8. 親子読書研究会」は、実は架空のものであり、この種の認知度調査の信頼度を明らかにする目的で設けたものである。結果は、「参加あるいは利用した」と答えた者の比率がこの2つで最も低く、その一方で「知らない」の比率が最高になっており、一応信頼性は確認されたことになる。また、

第3表 学歴別に見た施設利用度¹⁾

施設	学歴 ²⁾				
	全 体 (481人)	中学校卒 (118人)	高 校 卒 (225人)	短大・ 高専卒 (65人)	大 学 卒 (70人)
市立中央公民館	14.8% 5.0%	10.2% 5.1%	16.9% 4.9%	16.9% 4.6%	12.9% 5.7%
市立中央図書館	26.8 10.0	17.8 4.2	26.2 9.8	24.6 13.8	44.3 17.1
市立郷土資料館	7.3 0.8	6.8 —	8.0 0.9	6.2 1.5	7.1 1.4
県立民俗文化 センター	12.3 0.2	11.9 0.8	12.0 —	10.8 —	15.7 —

注1) 上段は「時々利用する」人の比率、下段は「よく利用する」人の比率。

2) 学歴について無回答が3名いるため、全学歴の合計人数は全体と一致しない。

第4表 学歴別に見た図書館の利用率

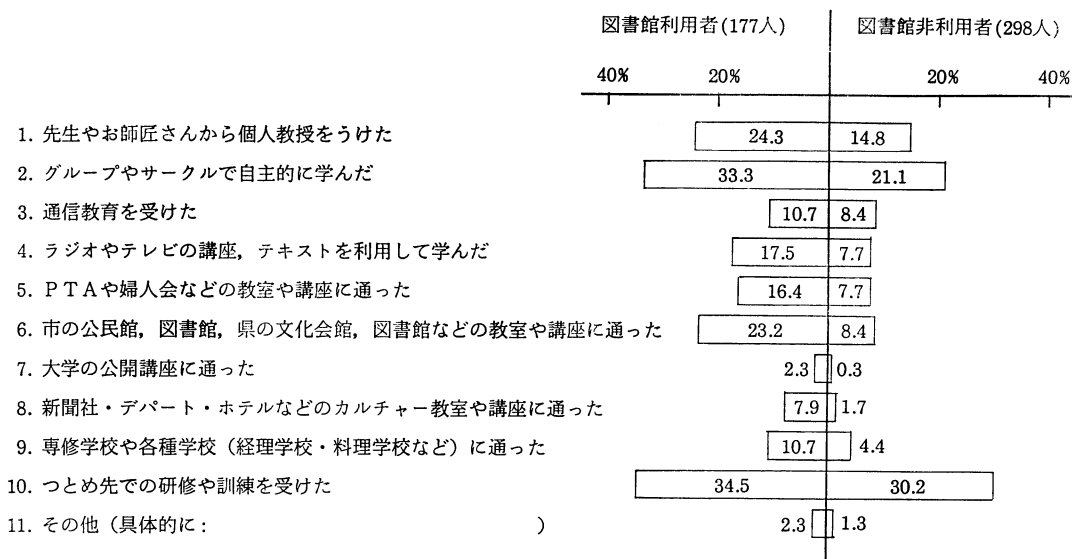
図書館利用	学歴				
	全 体 (472人)	中学校卒 (115人)	高 校 卒 (222人)	短大・ 高専卒 (65人)	大 学 卒 (70人)
利 用 者(A)	175人	26人	81人	25人	43人
非 利 用 者(B)	297人	89人	141人	40人	27人
利 用 率 (A/A+B)	0.37	0.22	0.36	0.38	0.61

公共図書館利用と文化活動の関連性

第5表 施設事業の認知度

100%=481人	知らない	聞いたことはあるが、どんなものかわからない	おおよその内容は知っている	参加あるいは利用した
1. 市民文化教養講座	37.6%	27.4%	27.7%	3.3%
2. 岩槻市文化財めぐり	27.2	27.0	37.6	5.4
3. 成人学級	41.2	26.8	23.3	2.1
4. 公民館クラブ・公民館友の会	52.8	23.5	13.3	5.2
5. 英会話の夕べ	68.6	17.3	8.3	0.4
6. 婦人ボランティア養成講座	53.4	24.1	15.0	1.5
7. 移動図書館「こだま号」	15.6	16.2	57.8	6.2
8. 親子読書研究会	63.0	16.4	13.5	0.6
9. ブックポスト（市立中央図書館）	47.0	12.5	20.0	14.8
10. リスニング・コーナー（市立中央図書館）	59.9	16.2	13.1	3.3
11. 相談コーナー（市立中央図書館）	49.5	25.4	18.9	0.8
12. リクエスト・サービス（市立中央図書館）	61.5	15.6	13.5	4.0

注) 合計が100%にならないのは、無回答があるためである。



第4図 各種文化活動への参加経験

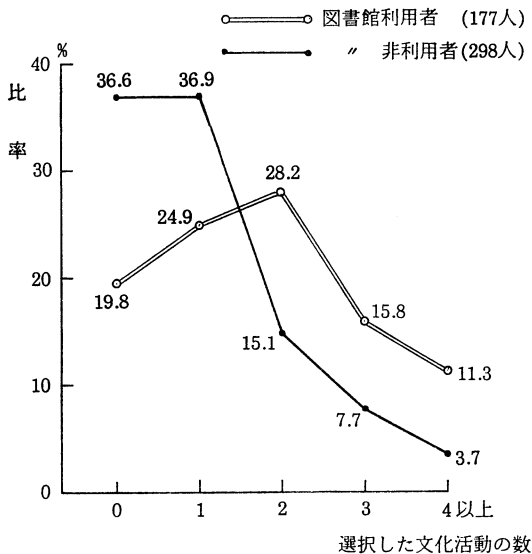
知っているとか、参加したとか答えた人のなかには、これら架空の事業と類似の名称で呼ばれている実在の事業（そういったものが公民館や図書館で催されていないことは事前に確認したのだが、他の公共・民間施設で催されているものまでは確認していない）と混同したとも考えられる。例えば、図書館では児童に対する読み聞かせ

を毎週1回やっており、親子連れも多い。また、図書館では「岩槻読書会」と呼ばれる読書会をはじめ、いくつかの読書会も組織されている。これらと「親子読書研究会」をとり違えた可能性がある。したがって、「英会話の夕べ」「親子読書研究会」を知っていたり、利用したりした人の比率がそれぞれ、8.7%、14.1%という今回

の結果から見るかぎり、この種の設問に対する虚偽の回答は10%以下と考えられ、まずまず信頼できるものと見てよいだろう。

E. 図書館利用と他の文化活動

第4図は、過去3年間の各種文化活動への参加経験(調査票の問3)を、図書館の利用者と非利用者に分けて



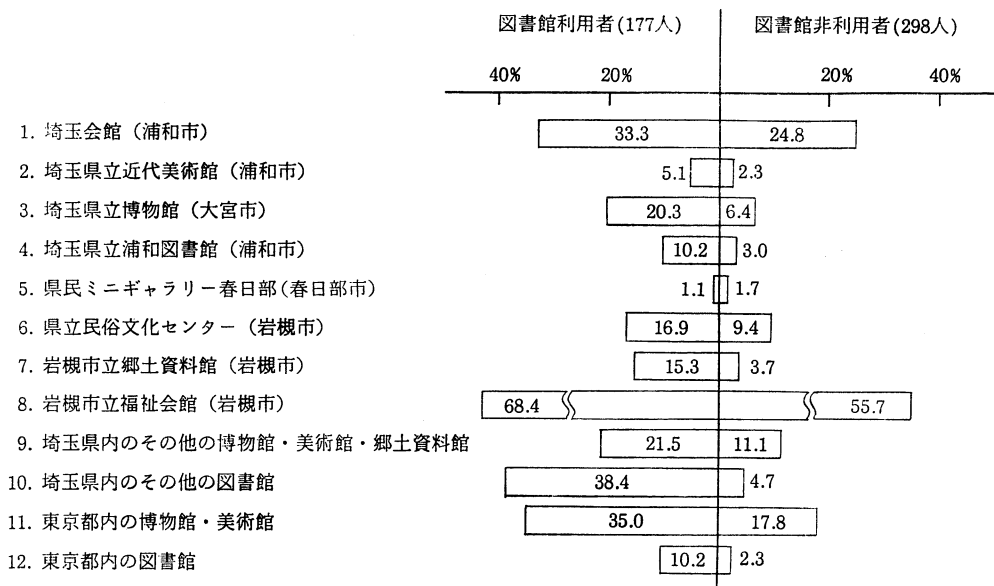
第5図 選択した文化活動の数

て示したものである。図書館の利用者は非利用者に比べて、文化活動と広く呼ばれているものにも積極的に参加していることがわかる。もちろん、ここでとり上げた活動だけで文化活動の全体がカバーできていると考えるわけではないが、これだけでも両者の文化活動に示す姿勢の違いをとらえることができよう。

同様のことを、今度は回答者が選択した文化活動の数で確認してみよう。(第5図参照)これは、単に上の設問(調査票の問3)で選択した文化活動の数をカウントし、それをグラフ化したものである。この図からは、利用者の活動数のピークが1から2にかけてのあたりであるのに対して、非利用者ではそれが0と1の間にあること、そして利用者の過半数が2つ以上の文化活動を行なっているが、非利用者では逆に1つ以下の活動しか行なっていないものが7割以上を占めること、などがとらえられる。いずれにしても、図書館利用者は非利用者にくらべて、文化活動に参加する機会を数多くもっていることが確認される。

F. 図書館利用と他の文化施設の利用

第6図は、図書館の利用者と非利用者の中で、岩槻市の周辺にある文化施設の利用度を比較したものである。全体としては、市立福祉会館や埼玉会館のような多目的ホールの利用が高くなっている。しかし、利用者と非利



第6図 文化施設利用度の比較

公共図書館利用と文化活動の関連性

第6表 図書館利用と日常の関心事

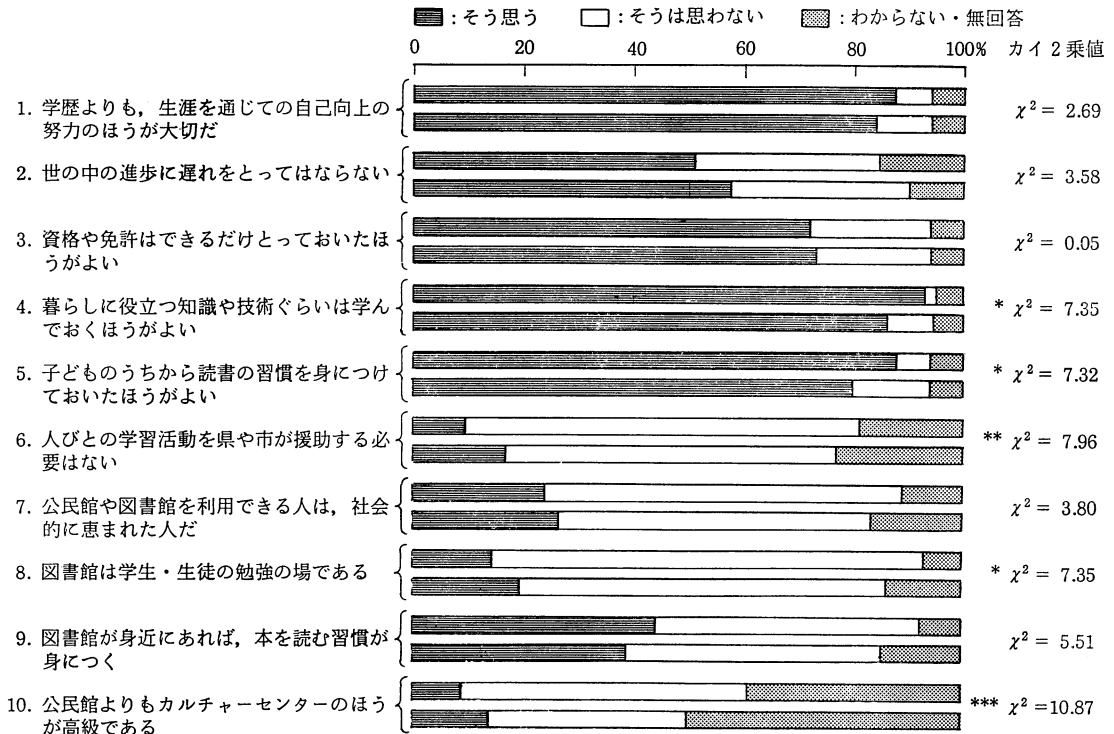
	利用者 (100% =177人)	非利用者 (100% =298人)	有意差 ($p < 0.05$)
1. 家族のこと	72.3%	73.8%	
2. 家計のこと	36.2	50.7	*
3. 交際のこと	26.6	28.5	
4. 趣味・学習	38.4	22.5	*
5. 道路・交通	7.3	11.7	
6. 地域生活	19.8	20.1	
7. 社会福祉	28.2	20.1	*
8. 公害・自然破壊	7.9	10.4	
9. 土地・住宅	9.6	14.4	
10. 経済	26.0	29.5	
11. 政治・社会一般	21.5	11.7	*
無回答	1.7	0.7	

利用者の間で比較してみると、県民ミニギャラリー春日部を除くすべての施設において、図書館利用者のほうが他の施設の利用率も高く、とくに県立博物館と県内の他の図書館の利用率には両者の間で大きな開きが見られる。一般に、図書館利用者は他の図書館を含め、文化施設をよく利用する傾向にあると見てよさそうである。

G. 図書館利用と日常の関心事

日常の関心事としては、選択肢の中から関心の高いものを3つまで選んでもらった。(調査票の間1)その結果をやはり図書館の利用者と非利用者の間で比較できるようにしたものが第6表である。すなわち、この表中の数字は、利用者と非利用者それぞれについて、関心をもっていると答えた人の比率であり、両者の間で有意差(有意水準95%)が検出された項目を*で示している。「趣味・学習」「社会福祉」「政治・社会一般」といった項目で、利用者のほうの関心が高いことは、図書館という公

それぞれ、上段は利用者の意見、下段は非利用者の意見。



*は $p < 0.05$, **は $p < 0.025$, ***は $p < 0.01$ を示す

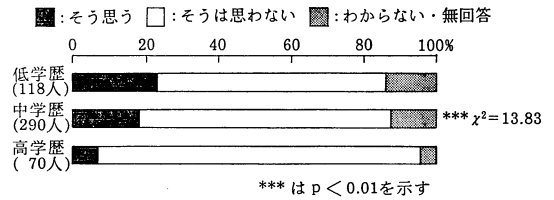
第7図 文化・教育活動に対する意見の比較

共施設の性格や、学歴と利用の関係、あるいは先の文化活動と利用の関係などからもある程度予想される。だが、「家計のこと」に対する関心がむしろ非利用者のほうで高く、非利用者の半数がこの問題に関心を寄せているという事実は注目すべきである。もちろん、「家計のこと」に対しては利用者も1/3以上が関心をもっており、非利用者との差は10%強であって、それほど大きな差ではない。しかし、非利用の1つの説明要因として、家計を支えたり助けたりといった日常生活のあり方を浮かび上がらせることは可能だろう。これは、高学歴の者に図書館の利用者が多く、現在のわが国の社会一般では、学歴と収入の間におおよそその相関があると見られることとも符合する。要するに、図書館を利用しない人のなかには、経済的な理由のために図書館を利用するだけの時間的、精神的な余裕がない人もいるのではないかということである。

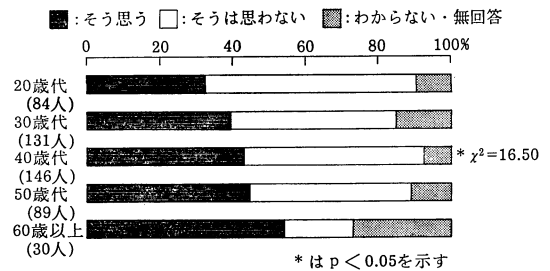
H. 図書館利用と文化・教育活動に対する意識

調査票の問2では、前項の日常の関心事よりももう少し図書館利用とかかわりをもつと思われる文化的もしくは教育的な活動について意見を求めた。結果を第7図に示したが、項目によって利用者而非利用者との間で有意差の見られるものとそうでないものがある。例えば、「6. 学習活動に対する公的援助の必要性」や「10. 公民館とカルチャーセンターの比較」についての意見には、両者の間で明確な違いが見られる。しかし、図書館の利用とこれらの意見との因果関係は、これまで考察してきた他の調査項目ほど明確ではない。すなわち、図書館を利用しているから公的援助の必要性を認めるのか、逆に公的援助の必要性を認めるような人だから図書館を利用するのか、単純には議論できない。また、上の2つの項目の他に有意水準95%で差の認められる項目もあるが、それらを含め全体として大勢を占める意見はいずれの項目においても同一である。唯一その例外である「10. 公民館とカルチャーセンターの比較」にしても「わからない・無回答」が多いために検出された有意差であるにすぎない。むしろ、こうした意識に影響を与えているのは、その他の個人的な属性だったようだ。

例えば、図書館を勉強の場と考えるかどうかは、学歴との間に有意の関係があった。(第8図参照) すなわち、学歴が高くなるほど、図書館を学生・生徒の勉強の場と考えない人の割合が増えてくる。また、図書館の存在と読書習慣の関係については、年齢によって意見の相違が



第8図 「図書館は学生・生徒の勉強の場である」に対する意見の学歴間比較



第9図 「図書館が身近にあれば、本を読む習慣が身につく」に対する意見の年代間比較

顕著に表れている。(第9図参照) この図から、年齢が高くなるにつれて、図書館の存在による読書習慣の獲得に対し肯定的な意見の持ち主の増える様子がとらえられる。このような今回の調査結果から、図書館利用と文化・教育活動に対する意識とをただちに結びつけて論じることはできない、と考えたほうが良いだろう。

I. 図書館・公民館利用の効果

この項目は、当然のことながら、図書館や公民館を利

第7表 利用の効果

	公民館 (100% =95)	図書館 (100% =177)
1. 仲間や友だちが増えた	49.5%	4.5%
2. 資格や免許がとれたり、試験に受かった	5.3	2.8
3. 有意義な時間をすごすことができた	54.7	36.7
4. 視野が広がり、話題が増えた	40.0	20.3
5. 仕事や勉強の役に立った	27.4	48.0
6. 生活にはり合いが出てきた	25.3	7.9
7. 特に変化や効果はなかった	13.7	18.1
8. その他(具体的に:)	0	5.1
無回答	6.3	6.2

注) 複数選択のため合計は100%を超える。

公共図書館利用と文化活動の関連性

用する人だけに調査しているため、両施設の相違に着目して結果（第7表参照）を分析することとした。

公民館利用者の大半は、公民館利用の効果を「1. 仲間や友だちが増えた」「3. 有意義な時間をすごすことができた」といった面でもらえている。これは、公民館の事業が集団で単一のプログラムにとり組む性格のものが多いためであろう。これに対し、図書館利用者は、総じて変化や効果として挙げたものが少なく、「3. 有意義な時間をすごすことができた」「5. 仕事や勉強の役にたった」が目につく程度である。これは、従来からの来館者調査が明らかにしてきたように、図書館の来館者の半数近くがとくに明確な目的をもたずに来館し、しかも集団ではなく個人で利用することがほとんどだからであろう。本稿でのこれまでの考察とあわせれば、公民館は集団による趣味教養志向であり、特定の目的をもった利用者を集めている一方、図書館は個人による仕事・勉強志向と娯楽・気晴らし志向とを兼ね備えており、広範な目的をもった利用者を集めていると考えられる。

J. 図書館・公民館の非利用の理由

図書館についても、公民館についても、利用しない人の断然多くが挙げた理由は「6. 利用する必要がない」であった。これに次いで、「1. 場所がよくわからない」「2. 遠い」「5. 何となく利用しにくい」などが挙げられているが、数はずっと少ない。これを隣接地区と遠隔地区とで比べてみると第8表のようになる。やはり、選択肢の1や2を選ぶ人は遠隔地区のほうが多くなっている。しかし、より注目すべきは、いずれの理由についても隣接地区より遠隔地区のほうが高い比率を示しているのに、非利用者全体で最も多くの人々が挙げる「利用する必要がない」については、隣接地区のほうが高い点である。ちなみに、学歴構成では、低学歴が隣接地区で28.6%、遠隔地区で20.6%を占めており、この差の分だけ中学歴や高学歴は遠隔地区のほうが多い。ところが、図書館の非利用の理由を学歴別に見ると、第9表に示すように、むしろ高学歴の人たちのほうが高い比率で「利用する必要がない」を挙げているのである。公民館の非利用の理由についても、これとほとんど同様の傾向が見られ

第8表 非利用の理由

公民館を利用しない理由	全 体 (100%=378)	隣接地区 (100%=178)	遠隔地区 (100%=200)
1. 施設の場所がよくわからない	11.6%	6.7%	16.0%
2. 施設が遠い	5.6	1.7	9.0
3. 施設の開館時間が適切でない	3.2	2.2	4.0
4. 利用手続きがよくわからない	8.7	2.8	14.0
5. 何となく利用しにくい	10.8	9.6	12.0
6. 施設を利用する必要がない	42.1	49.4	35.5
7. 他の施設を利用している	5.6	1.7	9.0
8. その他	8.7	9.6	8.0
無 回 答	25.4	24.7	26.0
図書館を利用しない理由	全 体 (100%=298)	隣接地区 (100%=138)	遠隔地区 (100%=160)
1. 施設の場所がよくわからない	8.1%	5.8%	10.0%
2. 施設が遠い	11.1	2.2	18.8
3. 施設の開館時間が適切でない	5.4	4.3	6.3
4. 利用手続きがよくわからない	3.7	3.6	3.8
5. 何となく利用しにくい	7.7	6.5	8.8
6. 施設を利用する必要がない	43.6	51.4	36.9
7. 他の施設を利用している	3.4	0.7	5.6
8. その他	7.4	8.7	6.3
無 回 答	21.8	21.0	22.5

第9表 学歴別に見た図書館非利用の理由

図書館を利用しない理由	低学歴 (100%=89)	中学歴 (100%=181)	高学歴 (100%=27)
1. 施設の場所がよくわからない	9.0%	7.2%	11.1%
2. 施設が遠い	14.6	10.5	3.7
3. 施設の閉館時間が適切でない	3.4	5.5	11.1
4. 利用手続きがよくわからない	4.5	2.8	7.4
5. 何となく利用しにくい	5.6	9.4	3.7
6. 施設を利用する必要がない	47.2	40.3	55.6
7. 他の施設を利用している	2.2	3.9	3.7
8. その他	5.6	6.6	18.5
無回答	16.9	24.9	14.8

る。したがって、隣接地区における低学歴層の多さによって、「利用する必要がない」の多さを説明することには無理がある。

このような結果をもたらした原因として、つぎのようなことが考えられよう。すなわち、遠隔地区の場合には、地理的な不便さという不可抗力の理由をあげて、みずからの非利用をいわば正当化することができる。しかし、隣接地区ではそうすることもできず、かといって他の理由もあてはまらない場合、用意された選択肢の中で利用そのものの必要性を否定してしまうことが、みずからの非利用を正当化する最も手っとりばよい選択だったのではないだろうか。用意した選択肢が必ずしも適切でなかったことは、他の設問に比べて無回答の比率が高かった点からもうかがい知ることができる。また、先に図書館の非利用の理由に触れたところで述べたように、「利用する必要がない」を挙げる人は、高学歴に多く見受けられ、これらの人びとが本当に利用の必要がないかどうかは、第三者から見て疑問に思われる。市内施設が利用されない理由については、これら非利用者の日常生活や行動様式に関し、もう少し綿密な調査や分析が必要とされるだろう。もちろん、今回の調査においても、「場所がよくわからない」「利用手続きがわからない」「何となく利用しにくい」等の理由を挙げたものがそれぞれ1割前後いるのであるから、図書館や公民館としては広報活動に力を入れることも忘れてならない対策である。

IV. 公共図書館と文化活動

A. 住民調査の結果の要約

公共図書館の利用と文化活動との関わりについて考察するにあたって、まず今回の住民調査からわかったこと

を要約して示しておこう。

- 1) 市内施設の利用状況としては、市立図書館の利用率が最も高く、市立公民館、県立民俗文化センター、市立郷土資料館の順で続いている。学歴別に利用率を見ると、いずれの学歴層においても施設ごとの利用率は先の順序と変わらないが、公民館は中学歴（高校卒、短大・高専卒）の利用がやや高く、民俗文化センターと郷土資料館は学歴層間で大きな差はない。これに対し図書館は、学歴が高くなるにつれて利用率も高まるという特徴をもつ。
- 2) 図書館と公民館を比較してみると、1)で挙げたような学歴による利用率の他に、利用の効果の点で違いが見られる。また、公民館主催の事業の認知度は、図書館内の施設やサービスの認知度に比べて決して低くない。
- 3) 隣接地区と遠隔地区では、施設の利用に大きな差異は見られないものの、利用しない理由でやや差が見られる。すなわち、遠隔地区では当然のことながら「遠い」を理由に挙げる人が多いが、隣接地区では「利用する必要がない」を挙げる人が半数に達する。
- 4) 図書館の利用者は、他の文化活動や自主的な学習活動に参加していることが多く、また他の文化施設もよく利用している。とくに、県内の他の図書館の利用度は非利用者に比べて極めて高い。
- 5) 図書館の利用者と非利用者の日常の関心事を比べてみると、「趣味・学習」「社会福祉」「政治・社会一般」などに対する関心が利用者で高いが、「家計のこと」については、逆に非利用者のほうが高い関心を寄せている。

公共図書館利用と文化活動の関連性

B. 文化行政への示唆

次に、今回の調査の主要な目的の1つであった文化行政への示唆という観点から考察を進めよう。

一般に、各自治体は地域住民の文化活動や学習活動を奨励し、援助するためにさまざまな施策を展開している。これは、具体的には市民会館や体育館、図書館、コミュニティ会館などの施設の整備、そしてこれら文化・教育施設を通じての各種事業の運営ならびに開催というかたちで実施される。その場合に、地域住民の高学歴化やニーズの多様化といったものへの対応が、今日の文化行政にとって重要であることは論をまたない。それ故に、各地で多種多様な施設が設置され、数多くの事業が運営されているのである。しかし、それらの多様な施設や事業は、さまざまな住民層のさまざまなニーズを的確にカバーできているのだろうか。

ここでは、図書館利用と他の文化施設の利用の関係にしばって検討してみよう。前章の調査結果でも示したように、図書館の利用者和其他の施設の利用者とは学歴構成から見るかぎり、明確な相違が見られる。図書館だけが、学歴の上昇とともに利用率も高まるという意味で高学歴志向であるし、公民館は公民館でやはり独自の学歴構成をとる利用者層をもっている。この意味では、各施設は異なった住民層の異なったニーズに応えていると考えられる。だが、図書館の利用者は、同時に、他の文化施設の利用や文化活動の参加にも非利用者に比べて積極的であった。図書館を利用しない層に対しては、本稿でとり上げた文化事業が必ずしも効果的に利用されていない

いと言ってよいだろう。逆に言えば、図書館利用者は図書館利用だけでなく、他のさまざまな機会を通じて文化活動を展開する可能性をもっていることになる。とくに、公的な文化施設の利用機会は高いと見られる。したがって、図書館を利用しないような住民層をもこの種の文化施設に引きつけるには、その運営方法や、事業内容に相当な工夫が必要である。

この工夫に対する1つの示唆が、やはり今回の調査結果から得られる。すなわち、くり返し指摘してきたように、図書館利用を特徴づける主要な属性は学歴だったわけだが、その他の文化活動についても学歴によって特徴づけることが可能なのか、また、少数ではあるが、低学歴にもかかわらず図書館を利用する人びとがいるわけだが、この人たちの文化的な活動状況はどのようなものなのか、などについて探ってみるにより、そうした示唆が得られよう。

そこでまず、Ⅲ-E で見た各種文化活動への参加経験を学歴別に見てみよう。(第10表参照) これは、回答者全体について学歴別に文化活動度を見たものだが、この表から図書館利用だけでなく文化活動全般についても、学歴が高くなるにつれて活動度が高くなることがわかる。ただ、この場合に注意しておきたいことは、各種の文化活動全体を通じて高学歴の者ほど活動度が高いわけだが、「5. PTAや婦人会などの教室や講座に通った」「6. 市の公民館、図書館、県の文化会館、図書館などの教室や講座に通った」の2つについては、中学歴が中心で、これに低学歴が続いている点である。図書館の利

第10表 学歴別に見た文化活動への参加経験

	低学歴 (100%=118人)	中学歴 (100%=290人)	高学歴 (100%=70人)
1. 先生や師匠からの個人教授	11.0% (13)	20.3% (59)	21.4% (15)
2. グループ・サークル活動	15.3 (18)	26.9 (78)	35.7 (25)
3. 通信教育	4.2 (5)	10.0 (29)	14.3 (10)
4. ラジオやテレビの講座	7.6 (9)	10.3 (30)	21.4 (15)
5. PTAや婦人会の教室・講座	8.5 (10)	13.8 (40)	2.9 (2)
6. 公民館や図書館の教室・講座	12.7 (15)	15.5 (45)	10.0 (7)
7. 大学の公開講座	— (—)	0.7 (2)	2.9 (2)
8. カルチャー教室や講座	2.5 (3)	3.1 (9)	11.4 (8)
9. 専修学校や各種学校	0.8 (1)	8.6 (25)	8.6 (6)
10. つとめ先での研修や訓練	16.9 (20)	32.4 (94)	51.4 (36)
11. その他	2.5 (3)	1.4 (4)	1.4 (1)

注) カッコ内はその活動を選択した実人数である。

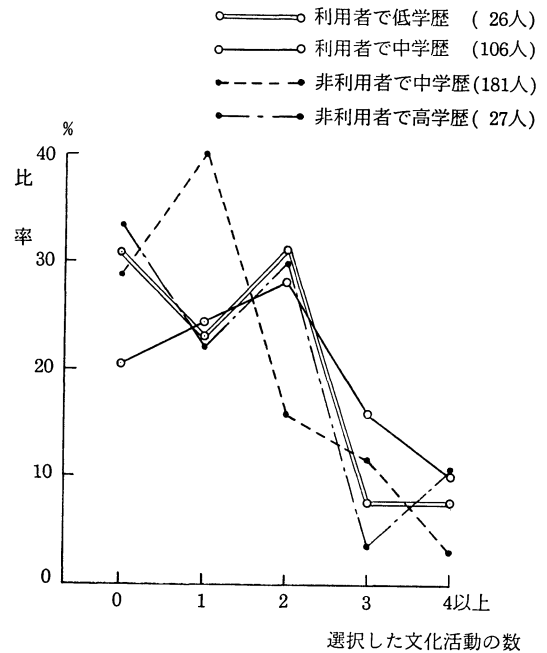
用率が低い低学歴層を引きつけるための方策が、このあたりに考えられる。

また、ここでは数値データとして示さないが、Ⅲ-Fで見たような各種文化施設の利用の状況も学歴別にみれば、上の文化活動と同様の傾向にある。ただ、この場合には例外として「8. 岩槻市立福祉会館」の利用が、むしろ低学歴のほうで高くなっている。これらの事実から、一般に低学歴層は、図書館利用だけでなく文化活動全般にわたって利用や参加の割合は低いと見られる。そこで、このような低学歴層に対するより効果的な文化行政施策への手掛かりを得るために、次に、低学歴でありながら図書館を利用する人について見てみよう。

第11表は、低学歴ないし中学歴でありながら図書館を利用する人たちと、中学歴ないし高学歴でありながら図書館を利用しない人たち、それぞれについて他の文化活動への参加状況をまとめたものである。さらに、第10図は、それぞれのグループの人たちが選択した文化活動の数を、先の第5図と同じようにしてグラフ化したものである。この第11表と第10図とから、学歴が低くとも図書館をはじめとする各種文化施設を利用し、いくつかの文化活動にも積極的に参加する学習意欲の盛んな人たちの存在を確認することができる。この人たちの文化的な活動度は、高学歴だが図書館を利用しない層に匹敵するのである。

以上の考察から、次のように結論づけることができる。図書館の利用層は、他の文化・教育施設の利用層に

比べて幅広く広範に及んでいるが、学歴が高くなるほど利用率も高くなるという意味で高学歴志向である。彼らは学歴構成から見て、公民館の利用層とはやや異なると考えられ、この限りでは、多様な施設の建設・整備が地域住民の多様なニーズに対応できているとも言える。し



第10図 図書館利用と学歴別に見た文化活動の数

第11表 図書館利用と学歴別の文化活動

	図書館の利用者		図書館の非利用者	
	低学歴 (100%=26人)	中学歴 (100%=106人)	中学歴 (100%=181人)	高学歴 (100%=27人)
1. 先生や師匠からの個人教授	23.1% (6)	23.6% (25)	18.2% (33)	14.8% (4)
2. グループ・サークル活動	23.1 (6)	33.0 (35)	23.8 (43)	29.6 (8)
3. 通信教育	3.8 (1)	9.4 (10)	10.5 (19)	7.4 (2)
4. ラジオやテレビの講座	11.5 (3)	16.0 (17)	7.2 (13)	14.8 (4)
5. PTAや婦人会の教室・講座	15.4 (4)	21.7 (23)	9.4 (17)	— (—)
6. 公民館や図書館の教室・講座	30.8 (8)	24.5 (26)	10.5 (19)	3.7 (1)
7. 大学の公開講座	— (—)	0.9 (1)	0.6 (1)	— (—)
8. カルチャー教室や講座	7.7 (2)	5.7 (6)	1.7 (3)	7.4 (2)
9. 専修学校や各種学校	— (—)	12.3 (13)	6.1 (11)	3.7 (1)
10. つとめ先での研修や訓練	23.1 (6)	31.1 (33)	33.7 (61)	55.6 (15)
11. その他	— (—)	2.8 (3)	0.6 (1)	— (—)

注) カッコ内はその活動を選択した実人数である。

かし、他の文化施設の利用や文化活動とも考えあわせてみると、図書館の利用層は図書館以外の施設や活動も積極的に利用している、そして一方では、図書館の非利用層がそういった施設や活動の利用に消極的であるという現象が見られる。したがって、図書館をはじめとする各種の文化・教育施設の整備は、高学歴者ないし学習意欲の盛んな人という特定の住民層がもつ種々のニーズには対応し得ても、これらを利用しない人あるいは利用に積極的でない人に対しては、必ずしも効果をあげていないことになる。そして、現状ではいわば文化活動志向にないこれらの人びとに対して行政側に考えられる対応は、公民館主催事業を中心とする集団的な文化・学習活動への援助である。なぜならば、現在のところ、公的な文化行政において、動員することが最も難しいと思われる図書館非利用層を、十分とはいえないまでも引きつけているのは公民館であって、公民館の活動やその利用者が挙げる利用の効果を見ると、彼らが同じような環境や条件にある仲間を求めている、と考えられるからである。

ここで文化行政に携わるものは、おおまかに2つに分けられる方策について選択を迫られることになる。すなわち、すでに文化活動志向にある人びとの広範なニーズを充足するべく、既存の施設に加えて、より多様なサービスが展開できる施設を整備していくのか、それとも、文化活動志向にない人びとを念願において、彼らに見合った集団的な事業を既設の公民館を中心にして充実させていくのか、という選択である。今回岩槻市において実施した住民調査によって、今後の文化行政が取り組むべき重要な課題の1つがこのような形で提示されたわけである。そのいずれを選択するかは、自治体の行政とりわけ文化行政が、それぞれの「まちづくり」の方針のなかで決定していくべきことである。

V. おわりに

本稿では、図書館利用を1つのモメントとして、地域住民の文化活動への志向を明らかにしてきた。そしてその結果から、文化行政がかかえる重要課題の1つを政策決定上の選択事項として示した。もちろん、図書館利用は住民の文化活動の一形態にすぎず、これだけを糸口には、広範な文化活動の全貌が解明できたと考えているわけではない。しかし、従来の公共図書館調査が明らかにしてきた利用者像や利用行動よりも広い視野で住民の意識と行動をとらえる、という所期の目標は充分達せられたものとする。すなわち、このような視点に立つことによ

り、図書館整備を住民の図書館利用要求の充足という側面だけからとらえる近視眼的な思考から解放し、文化活動への要求充足のための一方策、というやや広い局面でとらえることができたのではないだろうか。それは、図書館を文化施設の1つとして位置づけ、文化行政のなかに埋没させてしまうことを意味はしない。むしろ、今日の公共図書館の存在意義とその役割を相対化させ、その重要性を浮彫りにするだろう。なぜなら、今回の調査も示唆するように、図書館ほど幅広い住民層を引きつけ、広範なニーズに対応しうる可能性をもつ文化施設は他にないからである。

本稿を締めくくりにあたって、調査の企画・立案段階で御協力いただいた岩槻市企画財政部企画課ならびに同市立中央図書館、同市立中央公民館の皆様には、この場を借りて御礼申し上げたい。なお、この住民調査は、常盤繁氏（独協大学教養部、当時）と鈴木真理氏（東京大学教育学部、当時）、そして筆者の3人で行なった共同研究の一部であり、本稿は、その調査結果を筆者がまとめて分析・考察したものである。

- 1) 糸賀雅児. 「わが国の図書館調査」. 図書館サービスの測定と評価. 森耕一編, 東京, 日本図書館協会. 1985, p. 85-121.
- 2) 大阪大学人間科学部社会教育論講座. 「ニュータウンの中の図書館」. 大阪大学人間科学部. 1982. 105, 11p.
- 3) 大阪大学人間科学部社会教育論講座. 「松原の市民図書館」. 天理, 日本図書館研究会. 1984. 305p.
- 4) 森 耕一, 川崎良孝, 佐藤毅彦. 「市立図書館の利用に関する調査」. 現代の図書館. Vol. 20, No. 2, p. 65-84 (1982)
- 5) 佐藤毅彦. 「公立図書館の利用に関する研究」. 図書館界. Vol. 34, No. 5, p. 322-330 (1983)
- 6) 森 耕一, 佐藤毅彦. 「市立図書館の利用者調査(1)」. 図書館界. Vol. 35, No. 4, p. 185-194 (1983)
森 耕一, 佐藤毅彦. 「市立図書館の利用者調査(2)」. 図書館界. Vol. 35, No. 6, p. 282-289 (1984)
- 7) 川崎良孝, 田中ひろみ. 「誰がどのように図書館を使っているか」. みんなの図書館. No. 102, p. 26-39 (1985)
川崎良孝, 田中ひろみ. 「誰がどのように図書館を使っているか 続」. みんなの図書館. No. 103, p. 48-61 (1985)
- 8) 大沢まどか, 杉村 優. 「公立図書館利用の実証的研究(1)」. 図書館界. Vol. 37, No. 2, p. 49-60 (1985)
大沢まどか, 杉村 優. 「公立図書館利用の実証的研究(2)」. 図書館界. Vol. 37, No. 4, p. 186-199 (1985)

- 9) 植松貞夫, 緒方みどり. “複数館設置都市における登録者の利用状況”. 図書館学会年報. Vol. 31, No. 3, p. 122-133 (1985)
- 10) 図書館問題研究会東京支部練馬の図書館調査委員会編. “図書館組織網の形成へ<データ編>”. 東京, 図書館問題研究会東京支部. 1983. 233p.
図書館問題研究会東京支部練馬の図書館調査委員会編. “図書館組織網の形成へ<分析編>”. 東京, 図書館問題研究会東京支部. 1985. 142p.
- 11) 田村俊作, 酒井裕美子. “公共図書館の Availability 評価”. Library and Information Science. No. 21, p. 49-69 (1983)
- 12) 寄藤 昂. “市民の読書行動と図書館利用に関する研究”. 図書館学会年報. Vol. 28, No. 2, p. 79-87 (1982)

公共図書館利用と文化活動の関連性

(資料)

調査票

問1 あなたは日頃どのようなことに関心をおもちですか。次の中から関心の高いものを3つまで選んで○印をつけて下さい。

1. 家族のこと（育児，子供のしつけ，教育，進学，結婚，就職など）
2. 家計のこと（買物，貯蓄，物価，税金など）
3. 交際のこと（近所づきあい，親せきづきあい，職場の対人関係など）
4. 趣味・学習（けいこ事，スポーツ，音楽，映画，読書，レジャーなど）
5. 道路・交通（道路整備，通勤・通学ラッシュなど）
6. 地域生活（文化・教育施設，下水道，防犯，防災，医療など）
7. 社会福祉の問題（年金，老人，母子・心身障害者の問題など）
8. 公害・自然破壊の問題（騒音，大気汚染など）
9. 土地・住宅（マイホーム建設，マンション購入など）
10. 経済の問題（景気の動向，公共料金など）
11. 政治・社会一般（選挙，社会風潮，外交など）

問2 次に，ものごとに対するいくつかの考え方があげてあります。その1つ1つについて，あなたはどのようにお考えですか。あてはまるものに1つずつ○印をつけて下さい。

	そ う 思 う	—	そ う 思 は わ な い	—	わ か ら な い
1. 学歴よりも，生涯を通じての自己向上の努力のほうが大切だ ……	1	—	2	—	3
2. 世の中の進歩に遅れをとってはならない ……	1	—	2	—	3
3. 資格や免許はできるだけとっておいたほうがよい ……	1	—	2	—	3
4. 暮らしに役立つ知識や技術ぐらいは学んでおくほうがよい ……	1	—	2	—	3
5. 子どものうちから読書の習慣を身につけておいたほうがよい ……	1	—	2	—	3
6. 人びとの学習活動を県や市が援助する必要はない ……	1	—	2	—	3
7. 公民館や図書館を利用できる人は，社会的に恵まれた人だ ……	1	—	2	—	3
8. 図書館は学生・生徒の勉強の場である ……	1	—	2	—	3
9. 図書館が身近にあれば，本を読む習慣が身につく ……	1	—	2	—	3
10. 公民館よりもカルチャーセンターのほうが高級である ……	1	—	2	—	3

問3 あなたは過去3年間に，次にあげたような方法で学んだことがありますか。学んだことのあるものをすべてに○印をつけて下さい。

1. 先生やお師匠さんから個人教授を受けた
2. グループやサークルで自主的に学んだ
3. 通信教育を受けた
4. ラジオやテレビの講座，テキストを利用して学んだ
5. PTAや婦人会などの教室や講座に通った
6. 市の公民館，図書館，県の文化会館，図書館などの教室や講座に通った
7. 大学の公開講座に通った
8. 新聞社・デパート・ホテルなどのカルチャー教室や講座に通った
9. 専修学校や各種学校（経理学校・料理学校など）に通った
10. つとめ先での研修や訓練を受けた
11. その他（具体的に：)

問4 あなたは過去3年間に、次のような施設を利用したことがありますか。利用したことのあるものすべてに○印をつけて下さい。

1. 埼玉会館（浦和市）
2. 埼玉県立近代美術館（浦和市）
3. 埼玉県立博物館（大宮市）
4. 埼玉県立浦和図書館（浦和市）
5. 県民ミニギャラリー春日部（春日部市）
6. 浦和市民会館（浦和市）
7. 大宮市民会館（大宮市）
8. 岩槻市立福祉会館（岩槻市）
9. 浦和市長郷土博物館（浦和市）
10. 大宮市長漫画会館（大宮市）
11. 埼玉県内のその他の博物館・美術館・郷土資料館
12. 埼玉県内のその他の市民会館・ホール・劇場
13. 埼玉県内のその他の図書館
14. 東京都内の博物館・美術館（上野の国立博物館，西洋美術館など）
15. 東京都内のホール・劇場（東京文化会館，国立劇場など）
16. 東京都内の図書館（国会図書館，日比谷図書館など）

問5 岩槻市では、一般市民向けに次のような講座を開設したり、便宜を図ったりしています。その名まえや内容をどの程度ご存知でしょうか。あてはまるものに1つずつ○印をつけて下さい。

	知 ら な い	聞 が い ら た こ ん な い は な あ る か	お 知 ら ず お お よ そ い の る 内 容 は	参 加 し た あ る い は 利 用			
1. 市民文化教養講座	1	—	2	—	3	—	4
2. 岩槻市文化財めぐり	1	—	2	—	3	—	4
3. 成人学級	1	—	2	—	3	—	4
4. 公民館クラブ・公民館友の会	1	—	2	—	3	—	4
5. 英会話の夕べ	1	—	2	—	3	—	4
6. 婦人ボランティア養成講座	1	—	2	—	3	—	4
7. 移動図書館「こだま号」	1	—	2	—	3	—	4
8. 親子読書研究会	1	—	2	—	3	—	4
9. ブックポスト（市立中央図書館）	1	—	2	—	3	—	4
10. リスニング・コーナー（市立中央図書館）	1	—	2	—	3	—	4
11. 相談コーナー（市立中央図書館）	1	—	2	—	3	—	4
12. リクエスト・サービス（市立中央図書館）	1	—	2	—	3	—	4

公共図書館利用と文化活動の関連性

問6-1 あなたはこれまでに、次のような市内の施設を利用したことがありますか。それぞれの施設についての利用状況をお教え下さい。(○印は1つずつ)

	そ の よ う な 施 設 は 知	名 前 を 聞 い た こ と は	あ る が 、 概 要 は 知 ら	概 利 用 を し た こ と は な い	時 々 (年 に 2、 3 回)	利 用 す る (月 に 1、 2 回)			
1. 市立中央公民館	1	—	2	—	3	—	4	—	5
2. 市立中央図書館	1	—	2	—	3	—	4	—	5
3. 市立郷土資料館(2階のミニギャラリーを含む) ...	1	—	2	—	3	—	4	—	5
4. 県立民俗文化センター	1	—	2	—	3	—	4	—	5

問6-2 (市内の中央公民館や中央図書館を利用したことがある方におたずねします。)

公民館や図書館を利用して、どのような変化や効果がありましたか。次の中であてはまるものすべてに

○印をつけて下さい。

(1) **公民館** について

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. 仲間や友だちが増えた | 6. 生活にはり合いが出てきた |
| 2. 資格や免許がとれたり、試験に受かった | 7. 特に変化や効果はなかった |
| 3. 有意義な時間を過ごすことができた | 8. その他 { 具体的に: } |
| 4. 視野が広がり、話題が増えた | |
| 5. 仕事や勉強の役に立った | |

(2) **図書館** について

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1. 仲間や友だちが増えた | 6. 生活にはり合いが出てきた |
| 2. 資格や免許がとれたり、試験に受かった | 7. 特に変化や効果はなかった |
| 3. 有意義な時間を過ごすことができた | 8. その他 { 具体的に: } |
| 4. 視野が広がり、話題が増えた | |
| 5. 仕事や勉強の役に立った | |

問6-3 (市内の中央公民館や中央図書館を利用したことのない方におたずねします。)

なぜ利用しないのか、次の中でその理由としてあてはまるものすべてに○印をつけて下さい。

(1) **公民館** について

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 施設の場所がよくわからない | 6. 施設を利用する必要がない |
| 2. 施設が遠い | 7. 他の施設を利用している |
| 3. 施設の閉館時間が適切でない | 8. その他 { 具体的に: } |
| 4. 利用手続きがよくわからない | |
| 5. 何となく利用しにくい | |

(2) **図書館** について

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 施設の場所がよくわからない | 6. 施設を利用する必要がない |
| 2. 施設が遠い | 7. 他の施設を利用している |
| 3. 施設の閉館時間が適切でない | 8. その他 { 具体的に: } |
| 4. 利用手続きがよくわからない | |
| 5. 何となく利用しにくい | |

F1 あなたの性別は。

1. 男 2. 女

F2 あなたの年齢は。

1. 20～24歳 3. 30～39歳 5. 50～59歳
2. 25～29歳 4. 40～49歳 6. 60歳以上

F3 あなたのご職業は次のどれですか。あてはまるものに1つだけ○印をつけて下さい。

1. 農林漁業（農業，造園業，林業などの自営）
2. 商工サービス業（商店主，サービス業，工場主などの個人経営者）
3. 自由業（弁護士，会計士，医師，芸術家などで雇われてない人）
4. 農林漁業 }
5. 商工サービス業 } 上記の自営業に家業として従事している人
6. 自由業 }
7. 管理職（大きな会社・団体の部長以上，学校長，官庁の課長以上の人）
8. 専門技術職（大学卒業以上の技術者，医師，弁護士などで雇われている人）
9. 事務職（一般事務，タイピスト，事務系公務員，看護婦などの人）
10. 技能・作業職（運転士，店員，工員，ウェイトレスなどの人）
11. 無職の主婦（家事を担当している人でも，何らかの仕事に従事している人は除く）
12. 学 生
13. その他（失業者，全収入を生活保護に頼る人，年金で生活している人など）

F4 あなたが最後に卒業もしくは中退した学校（あるいは現在，在学している学校）は次のどれですか。（各種学校，専修学校は除きます。）

1. 小学校・中学校（旧制：尋常小学校，高等小学校）
2. 高等学校（旧制：中学校，師範学校，商業女学校，実業学校）
3. 短大・高等専門学校（旧制：高等学校，高等師範，高等専門学校）
4. 大学・大学院

F5 あなたは，現在どのような家族と住んでいますか。あなたご自身から見てお答え下さい。

1. 単 身 4. 配偶者と中学生以上の子供
2. 配偶者（妻または夫） 5. その他 { 具体的に：
3. 配偶者と小学生以下の子供 }

F6 あなたは，いつから岩槻市にお住みですか。

1. 昭和35年以前 3. 昭和46年～昭和55年
2. 昭和36年～昭和45年 4. 昭和56年以降

ご協力どうもありがとうございました。